

ケアプラン 自ら選択を

介護保険サービスの利用内容などを定めるケアプラン(介護計画)の自己作成に取り組む市民団体「マイケアプラン研究会」(京都市)が今月、設立20年を迎えた。介護保険制度が始まる前年に会を立ち上げ、制度の変遷を見てきた小國英夫代表(80)に、研究会の歩みや制度の課題などについて聞いた。

(中村幸恵)

京の市民研究会設立20年 小國代表に聞く

介護保険制度は、行政が決める措置制度から契約制度へと介護の在り方を大きく変えた。契約とは、本人の意思でサービスを選択するということ。自分の人生をどう大事に生きるかを考えた上でサービスを自ら選ぶことを実現させようという研究会を作った。入門・実践ガイドを発行したり、勉強会をしりしてきた。

最低限ではだめ

しかし、マイケアプランの考えは、広がったとは言いがたい。この20年で「介護イコール介護保険サービス」「ケアプランはケアマネジャーが作るもの」と意識に刷り込まれた。介護を考えたとき、どこまでサービスを使うか、どこで老人ホームに入るかといった話から始まることが多い。サービスの利用が目的になってしまっている。本来はどう生きるか、どんな暮らしをしたいかが目的であり、それを実現するためにサービスの活用を考えないといけない。



「マイケアプランとは、人生で何を大事にしたいか考えること」と話す小國代表(京都市下京区、ひとまち交流館京都)

人任せにせず、注文付けよう

任せにしてしまう。どんなメニューでもいいから食事をして、トイレと入浴の世話をしてもらったらいいわけではない。それは生きていく上で最低限必要なこと。最低限だけ満たせばよろしいという考えは、人生のラストステージを迎えるのにあまりにもさみしい。

ケアとは自分の暮らしや人生を大事にするということ。昨年亡くなった私の家内の場合、生前に私から医師や看護師、ケアマネジャー、ヘルパーらに気を付けてほしい点や、家内がどんな生活を送り、どんなことが好きかを話した。こうしたことが伝わらなければ、介護が機械的なものになってしまうと考えた。

ケアマネに相談

ただ、私たちはケアマネジャーが必要ないと言っているわけではない。ケアマネの方はいろいろな情報や知恵を持っている。自分の考えを十分に話せ、それを尊重してくれるケアマネを見つけて、相談するのも一つの方法だ。

団塊の世代が介護を受けるこれからは、「老いては子に従え」という従来の考え方が変わり、マイケアプランが広まるかもしれない。しかし、介護保険制度はどんどん複雑になっており、ますます専門職にお任せ状態になっている。もっと分かりやすいものになっていかないといいない。

講演や寸劇で節目祝う 8日、上京

マイケアプラン研究会は、設立20年記念の公開企画「だんだん介護が遠くなる 介護ってなに?」を9月8日午前10時から京都市上京区の京都社会福祉会館で開く。



寸劇の練習をする会員たち

31日までに名前、参加人数、住所、連絡先電話番号、公開企画後の懇親会(4千円)参加の有無を書いて同会のファクス075(392)0443へ申し込む。

う間に時間が過ぎてしまいま

きた両親とハルコのおじが言 越すことになりました。おじい